

英国における移民と排外主義

北海道大学 樽本英樹

1. 問題の所在

ヨーロッパに排外主義の風が吹き荒れている。英国も例外ではない。2000年代以降、排外主義は特に顕著になっている。それに伴い、社会統合原理としての多文化主義への疑いが強く表明されるようになってきた。第1に、いくつかのバリエーションがある中、英国における多文化主義の特徴はどのようなものだろうか。第2に、排外主義を含む過激主義は多文化主義にどのような影響を与えているのであろうか。

2. 英国多文化主義の成立

多文化主義と一言でいっても、その内実は多様である。1950年代以降、旧植民地からの入移民が英国社会に定住していく。流入および定住化に伴い、新英連邦移民たちは新英連邦諸国別の人種とエスニシティのカテゴリーによって言説化された。ここから人種関係 (race relations) という視角が生まれた。そして英国は、人種関係パラダイムに基づいて人種集団間での平等を実現することで、社会統合を達成しようとしてきた。それらの帰結として、個々の人種・エスニック集団の文化を尊重しようという社会規範が生まれてきた。

3. 人種関係パラダイムの揺らぎ

しかし1990年代後半以降、人種関係パラダイムに動揺が走ることになる。人種関係パラダイムを動揺させた第1の要因は、「超多様性の出現」とまとめることができる。さらに、移民の言説化にも変化が訪れた。人種およびエスニシティに加えて、2000年以降は新たに「宗教」が注目されるようになった。ムスリム移民が英国社会にもたらした衝撃の中でもっとも大きなものは、イスラム過激主義 (Islamist extremism) の登場であろう。しかし、過激になったのはムスリム移民だけではない。マジョリティの側からも過激な動きが現れてきた。過激主義の活発化を象徴的に示しているのは英国国民党 (British National Party, BNP) など極右政党の伸張である。

4. 累積的過激主義

大衆マジョリティの中にイスラム嫌悪的な感情が存在し、それがゆえにマジョリティの過激主義は生じてくる。もちろん、イスラム過激主義による諸事件もマジョリティ過激主義を刺激する。逆に、マジョリティの過激主義をめぐる事件が増加および先鋭化することで、イスラム過激主義がさらに促進されていく。このイスラム過激主義とマジョリティ過激主義の相互作用のことを、累積的過激主義 (cumulative extremism) と呼ぶことができる。

5. 再国民化とムスリム・パラダイム

累積的過激主義が進展していくと共に、英国が築き上げた人種関係的多文化主義への疑問もわき起こってきた。「コミュニティ結合」の模索など一連の動きは「再国民化の模索」と概念化することができる。一方、イスラム教など宗教を根拠とした反差別制度への移行、すなわちムスリム・パラダイムへの移行が見られるという主張も提出されている。しかし、過激主義の顕著化が多文化主義の失敗を示す証拠とまで言えるかどうかは、より周到的な検討を要する。

* 本発表は以下の助成を受けて行われた研究の一部である。JSPS 科学研究費補助金・基盤研究 (C) (研究代表者 樽本英樹 課題番号 26380661)。